

# 文章を色分けして、構成を捉える

第一回で紹介した、挿絵を拡大提示する手立てにはチャレンジしていただけたでしょうか。今回は、国語の授業でよく見られる、「文章に線を引いて色分けしながら読む」という手立てを取り上げたいと思います。



金沢星稜大学教授 佐藤幸江  
東京都生まれ。横浜国立大学大学院教育学研究科修了。横浜市内の公立小学校教諭、主幹教諭を経て、現職。専門分野は、教育工学（授業設計、情報教育）、教科教育法。共著書に「タブレット端末で表現する協働的な学び」（フォーラムA）など。

## 1 文章を色分けしながら読む

文章に線を引き、色分けしながら読む——デジタル教科書を使わずとも、黒板や模造紙などを使って、すでに実践されている先生は多いと思います。

デジタル教科書を活用している教師を対象とした意識調査の結果（※）では、中堅以上の教師がより効果を実感しており、よく活用する機能として「線を引く」ことを最も多く挙げています。「線を引く」という機能は、それまでの自分の授業スタイルを変えずに取り入れることができるため、そのことが活用効果の実感へつながったものと思われます。

今回は、デジタル教科書を使って、文章に線を引きながら読むという学習活動を取り入れた単元「説明のしかたを考え

よう」（四年下「アップとルーズで伝える」）の事例をご紹介しますと思います。

## 2 単元の指導目標

◎目的に応じて、中心となる語や文を捉えて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むことができる。（読む(1イ)）

○指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使うことができる。（伝国イ(ウ)）

## 3 単元の指導計画

▼第一時  
教科書の写真を見て思ったことを話し合い、学習計画を立てる。

ここで活用!

▼第二・三時  
写真と文章を関係づけて、「アップ」「ルーズ」の定義について考えながら、第一〜三段落を読む。

▼第四・五時  
写真と文章を関係づけて、対比の関係を捉えながら、第四〜六段落を読む。

▼第六時  
第七・八段落を読み、筆者の伝えたいことを捉える。

▼第七・八時  
各段落に小見出しを付け、文章の構成を図にまとめる。

## 4 活用のポイント

### ■読み取らせたいこと

本教材の筆者は、写真と文章を対応させて「アップ」と「ルーズ」の特徴について説明しながら、「テレビでも新聞でも、受け手が知りたいことや送り手が伝えたいことは何かを考えて、伝え方を使い分けている」ということを述べています。

第一段落では、一枚目の写真（教科書P30）に写っている物事が客観的に述べられ、最後に「会場全体が、静かに、こうふんをおさえて、開始を待ち受けている感じが伝わります。」と結んでいます。続く第二段落の最後の一文、「少しうつむいて、目がボールに向けられているのが分かります。」には、二枚目の写真（P31）についての細かい描写が見られます。そして、第三段落では、「初めの画面のように、**広いはんい**をうつすととり方を『アップ』といます。」と説明しています。これらを踏まえると、「アップ」と「ルーズ」を対比させ、それぞれについて書かれている部分を写真と対応させて確かめ

ながら読んでいくことが、文章の内容や説明のしかたの工夫を読み取ることにつながると考えられます。

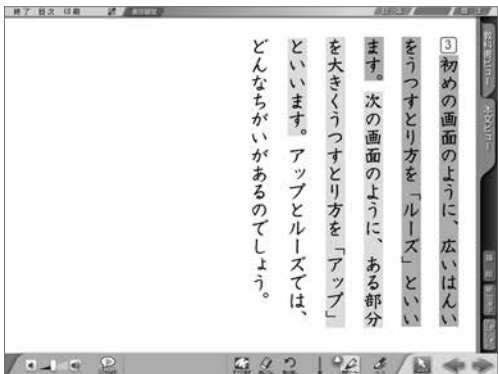
### ■写真と文章を対応させて読む

#### （第二・三時）

本時では、子どもたちに、第一〜三段落中の、「アップ」の定義が書かれている部分には赤い線を、「ルーズ」の定義が書かれている部分には青い線を引かせるようにしました。「アップ」と「ルーズ」を対比させながら、それぞれの定義を読み取らせたいと考えたためです。

ただ、第三段落（図1）にある「広いはんい」「ある部分」という抽象的な言葉が示すものを具体的にイメージすることができなければ、言葉や文章の理解が曖昧になってしまいます。そこで、第一段落の「会場全体」「コート全体」「観客席」という言葉がそれぞれ、一枚目の写真に写っているどの部分を指すのかを考えるよう、子どもたちに投げかけました。

同様に、第二段落では、「コートの中央に立つ選手」「ホイッスルと同時にボールをける選手」という言葉と、写真に写っている選手を結び付けて考えさせました。これによって、子どもたちは、言葉の意味や筆者の伝えたいことをより正確に理



▲図1 第3段落の文章を表示し、線を引いて色分けした画面（「国語デジタル教科書」本文ビュー）。

解できたように思います。このように、写真と文章を対応させるつまずき、写真と文章を行き来しながら読むとき、写真と文章を同時に一つの画面上に映すことができるデジタル教科書が力を発揮します。

### ■まずは写真だけを見る（第四・五時）

実は、第二・三時では、文章を詳しく読んでいく前に、教科書の写真だけを見て分かることを出し合うようにしました。本時でも、子どもたちに視覚的な理解を促すために、第二・三時と同じように第四・五段落を読み進めることにしました。「アップ」の写真（P32）を見て分か

※山本朋弘、佐藤幸江、中川一史（2014）「小学校国語の指導者用デジタル教科書の活用効果に関する教職年数での比較分析」日本教育メディア学会第21回年次大会一般研究

う表現が使われていることに気づく姿が見られました。

このように、初めに、写真だけを見て分かる情報を押さえたうえで、写真と文章を対応させて読み進めたことで、筆者が選んだ言葉・表現の意味や意図に目を向けることができたようでした。

■考えを全体で共有する(第四・五時)

デジタル教科書の画面に、教科書P32・33の見開き(第四・五段落)全体を表示しながら、子どもたちの考えを書き込んでいくうちに、赤い線も青い線も引かれていない部分があることに気づく子どもが出てきました(右ページ図)。

ここは、「アップ」で分からないことが「アップ」の特徴として、「ルーズ」で分からないことが「ルーズ」の特徴として書かれている部分です。本教材の筆者の説明のしかたの工夫を知るうえで、重要な部分でもあります。

そこで、下の写真のように、板書で表を使って整理し、「アップ」の短所と「ルーズ」の長所、「ルーズ」の短所と「アップ」の長所を線で結びました。これにより、子どもたちは、両者が表裏の関係にあることを視覚的に理解することができたようでした。さらに、第四・五段落と



ら、全体で共有していきました。

先ほど、「アップ」の写真を見て、「袖のところがひらひらしているから、速く喜んで、速く走っているのだと思います」

「わたしも、そう思います。『アップ』だと、喜んでいて様子が分かります」

その後、教師が「どうして喜んでいて分かるのでしょうか」と問うと、子どもたちは、

「口を大きく開けて、ワーって叫んで走っているからです」

「袖のところがひらひらしているから、速く喜んで、速く走っているのだと思います」

などと、デジタル教科書の画面に映した写真に印を付けながら、気づいたことを次々に発言していききました。

そこで、教師は、「では、文章には、どのように書かれているか読んでみましょう」と発問し、子どもたちそれぞれに、自分の教科書に線を引きながら読むよう指示しました。

子どもたちは、自分の教科書の「アップ」で分かる部分には赤、「ルーズ」で分かる部分には青の線を引きながら読んでいきました。その後、それぞれの考えをデジタル教科書の画面上に書き込みながら

がら、全体で共有していきました。

先ほど、「アップ」の写真を見て、「袖のところがひらひらしているから、速く喜んで、速く走っているのだと思います」

「わたしも、そう思います。『アップ』だと、喜んでいて様子が分かります」

その後、教師が「どうして喜んでいて分かるのでしょうか」と問うと、子どもたちは、

「口を大きく開けて、ワーって叫んで走っているからです」

「袖のところがひらひらしているから、速く喜んで、速く走っているのだと思います」

などと、デジタル教科書の画面に映した写真に印を付けながら、気づいたことを次々に発言していききました。

そこで、教師は、「では、文章には、どのように書かれているか読んでみましょう」と発問し、子どもそれぞれに、自分の教科書に線を引きながら読むよう指示しました。

子どもたちは、自分の教科書の「アップ」で分かる部分には赤、「ルーズ」で分かる部分には青の線を引きながら読んでいきました。その後、それぞれの考えをデジタル教科書の画面上に書き込みながら



▶図2 教科書P32・33の見開きに書き込みをした画面(「国語デジタル教科書」教科書ビュー)。

もに、長所と短所が逆接の接続語でつながれていることを、口々に発言する様子が見られました。

本教材は、「アップ」と「ルーズ」の特徴を伝えるために、段落内でそれぞれの長所と短所を対比的に書き、さらに、段落相互の関係も対比的に書かれていきます。色分けしながら文章を読み、デジ

## 5 実践から分かること

本単元では、色を分けながら文章に線を引き、それを全体で共有したり、文章と写真を対応させて読んだりしました。これにより、子どもたちは、自らの気づきをもとに、中心となる語・文を的確に捉え、文と文との対比、段落と段落との対比に目を向けていきました。そして、文章の構成や筆者の説明のしかたの工夫をしっかりと理解することができたようでした。

デジタル教科書を使って、画面上に線を引き、それを全体で共有したり、文章と写真を対応させて読んだりしました。これにより、子どもたちは、自らの気づきをもとに、中心となる語・文を的確に捉え、文と文との対比、段落と段落との対比に目を向けていきました。そして、文章の構成や筆者の説明のしかたの工夫をしっかりと理解することができたようでした。

他学年、他教材でも、ぜひこの手立てを活用していただけたらと思います。これまでの授業スタイルを変えることなく取り入れることができるはずです。